

# せたかむじ

## 年表で読む 古平の歴史

《33》

発行・古平町史編纂室  
古平町文化会館 642-12590  
第125号・平成12年2月1日

産物は半値近くにまで下がった  
が、ほかから入ってくる米も安  
かつたのでなんとか主食は確保  
できたといいます。また、北海  
道ではバッタが大発生し、地域  
によっては農作物が全滅する  
いう大きな被害がありました。  
今も札幌市手稲山口に建つて  
いるバッタ塚（石碑）はその記念  
です。

新しい制度として三県一局時  
代を迎えたが、折からの不  
景気の中で事業もさっぱり進ま  
ず、早くも三県の廃止論も出る  
という有様でした。

### ■北海道庁時代

	本籍	寄 留	合 計	本籍	寄 留	合 計	戸 数 (戸)
人 口 (人)	二二七七	一一一七	三三五八	九七八	一一一七	二二七七	四七五
女	七四八	九七八	二二五五	五七八三	二七三	二七三	二七三

\*一時的によその土地や家に  
仮に住んでいる人

三県時代の行政区画



■開拓使が廃止され  
三県一局時代となる  
開拓使は明治五年(1872年)、関係する外国人の指導の下に十か年計画をたてました。これは当時のお金で一千円と、ほかに全道からの税収予算で、近代的な方法による開発事業として、北海道への移民の保護・農場・各種缶詰工場・醸造・炭鉱・鉄道など広い範囲にわたるものでした。予期したような成果は挙げられませんでした。それと国家の財政悪化や、いろいろな不正事件が起きたこと、あって、十か年計画が終わつた明治十五年(1882年)二月、開拓使が廃止になりました。そして北海道と千島は札幌・

■不景気とバッタの被害  
三県に分かれてからの時代は、全国的に不景気に見舞われ、水

道庁が置かれた明治

三県一局になつてからわずか四年後の明治十九年(1886年)一月二十六日、三県一局を廃止して北海道庁を置くことが定められ、これが現在まで続いているわけです。

しかし当時は北海道

路と函館に置かれることが定められ、これが現在まで続いているわけです。

分署は入船町の仲谷才吉ほか

らの寄付によつて新築されました。

警察の組織も変わって、小樽

警察署の下に古平・余市の二分

署が置かれることになり、古平

の分署は入船町の仲谷才吉ほか

らの寄付によつて新築されました。

札幌に、支庁は釧

路と函館に置かれるこ

とになりました。

十九年の古平郡の戸数と人口は  
次のように記されています。

5/13 小樽まで商用があり富丸で余市へ行く、上ナギである。

5/15 余市駅から馬車に乗り甲谷回漕店に着く、富丸が来ないので船はないという、十人ほどが待っていたが、陸行しようと相談していたら、ちょうど発動機船が一隻出るという、その時、甲谷に古平から電話があり、この強風に美國で火事だという、美國の客も四、五人いて心配している、船は五時に出港したがひどいダシ風で、ようやく六時半に新地へ上陸する。聞けば美國の火事は、三十戸ほど焼失してようやくおさまったという。

5/16 鮫製品の景気がよいが氣違い相場だ、数の子六千円で昨年の倍近い値段だ。

5/17 風が強く、火防組合総出で巡回する。鮫場も終り、前浜も網を揚げ船廻いなどが始まる。

5/18 歩方もボツボツ解散する、鮫の大暴騰で浜は景気がヤ騒ぎが毎日のようにあり、町

もいふたが、陸行しようと相談していたら、ちょうど発動機船が一隻出るという、その時、甲谷に古平から電話があり、この強風に美國で火事だといふたが、家でも三本も掛けたので百五、六十円にもなったといふ。

## 高野名幸作さんの日記から



【26】

いい、漁は悪かったが値段が高かったので、大漁年と変わりがない。かえって昨年より収入が多いくらいだ。

5/20 鮫の暴騰で漁夫は大喜びだ、歩方で十五本も当たったほかに、家でも三本も掛けたので百五、六十円にもなったといふ。

5/21 鮫製品も買う人ばかりで、値上がりをみて売る人がいないという状況だ。今年はな

かかったので、大漁年と変わりがない。かえって昨年より収入が多いくらいだ。

5/20 鮫の暴騰で漁夫は大喜びだ、歩方で十五本も当たったほかに、家でも三本も掛けたので百五、六十円にもなったといふ。

5/21 鮫製品も買う人ばかりで、値上がりをみて売る人がいないという状況だ。今年はな

んと風の強い日が続くことだ。火防組合や消防はこのところ毎日出て警戒する。

5/23 昨日來の暴風、恐ろしいことだ、美國で火事騒ぎが二回もあつたという。

5/24 ようやく風も止んでナギてきた、昨日、米沢市で大火があり、二千七百戸を焼き死傷者が七十、八十人という。

5/26 美国ではこのごろボ

ーは新知識を得た。掛売りの入金は予想以上の成績だ。

6/5 このごろ珍しく好天気が続く、我が家の農園のリンゴも花盛りで実にきれいだ。写真にでも写しておきたい、この分で実をつけたとしたら実際に大豊作だ。

6/6 四時ごろから自転車競争の練習で、四、五人が町を走っている、大会は二十四日に決まったということだ、運動会

も近づき、売り出し中で市況も活気づく。

6/7 町も景気が良い、明

日は小学校の運動会だという。商店も忙しい、呉服屋は今日まで売り出しである。夜になつて町出身の関定雄一座が、明日から古平座で興業するといふのでドンチャンばやしで町廻りする。

6/8 今日は小学校運動会だ、朝は快晴であったが、九時ごろから暴風となる、砂塵を巻き上げて困った天気だ、午後から少しずつ良くなり、運動会は五時ごろ終わつた。夜、関定雄一座の芝居を見物に行つたが、さっぱりおもしろくなかった。

6/12 二時半から道府技師二人に同道して、総勢十人ほどで各農園を見廻る、高野名、相坂、山、カから、本、渡辺、関口、伊藤まで行く、二、三日前から、花の散りぎわに花腐病が発生し相当の被害が出る、困ったものだ、平田さんの蜜蜂の飼育場を見て終わる。

靈場

## 古平の名勝地

観音堂ものがたり

&lt;7&gt;

丸山青峯観音堂　観音滝靈場の建設に先立つて、丸山中腹のほぼ現在地に小さな観音像がまつられていましたが、観音滝靈場の入

仏供養式も済んだことから、大正十四年、丸山海岸の石で新たに観音世菩薩像を彫り、お堂を新築することになりました。

これと同時に、海上安全の祈願をこめて漁船の標識灯も立てることになり、信徒の人たちは古平福聚会をつくつてこの事業を進めました。

観音堂も完成して観音世菩薩をまつり、九月二十六日、奉安式が行われましたが、当日の行列は三町(約三メートル)余りも続くという盛大なものでした。

\* へ丸山青峯観音堂については別項で記述

観音滝靈場用地　当時の町の一部を寄付　道から泥の木川に沿つて二吉ほどの道路用地には、それぞれ土地所有者が関係していましたが、從来もそこを通行していたのでそのまま借用することになり、靈場付近の原野については、泥の木・木村長之助が観音像設置場所の土地を寄付しました。

翌年は八月三十一日がお祭りでした。高野名幸作さんの日記から見てみましょう。

将来は道路沿いに、靈場にふさわしい観音像の設置を計画していましたので、土地の寄付は大きめ朗報となりました。

觀楓会をか　今回ノ觀音滝

ねて慰労会　入仏式二対シ

幹部、世話方ノ慰労会ヲ催シ、

觀楓慰安致シ度候間御賛同相成

度候也

期日　十月十九日

会場　堀ビヤホール

会費　金壺円也

この觀楓慰労会には三十人が出席

しました。

觀音滝　一周

の参拝　年を

迎えた翌十四年の

お祭りは、町道から

の入口にある熊

野神社祭と同じ日

に行われました。

かねてからの評

判を聞いて大勢勢

の参拝人が靈場を

を訪れ、当日の賽

銭は十三円余り、

志納金も四十円余りでした。

翌年は八月三十一日がお祭りでした。高野名幸作さんの日記から見てみましょう。

「晴　觀音滝参拝の日である。

朝早くから参拝の人が通る。自

転車で出かけたが、参拝する人

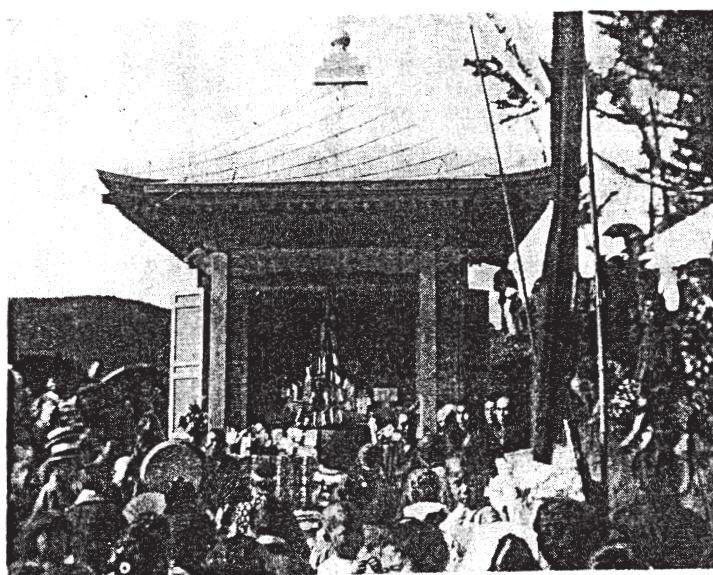
の八割は女人である。読経の

後、あちこちでご馳走を広げて

楽しんでいる。私たちは滝の上

まで行つて見た。(略)

〈丸山青峯観音堂新築〉



# 北海道・樺太・千島を探険

(2)

## 最上徳内

### を読んでみましょう



#### ▼まえがき

〔二〕

蝦夷地へは穀物の種を渡す事を停止しているので、アイヌの人たちは耕作することを知らない。それで田畠は全くない。それにアイヌの人たちは野菜を好まないようで、カブ・大根・ナス・豆類は全く無い。フキ・ゴボウは自然に生えているが一向に食べない。ただ魚肉や獸肉を食物としているが、草の根で食べているものが二、三種ある。

食事のときは椀が一つで、膳は使わない。汁の類は食べないようで、みそ・塩・醤油などはなく、魚肉や獸肉、草の根などは皆清水で煮て食べるが、ときには海水を入れて味付けをすることがある。食事の時間も決まっていないようで、昼夜にかまわず好きなときに食べる。食物のあると

きはいつも食べているが食物が無くなると二、三日は食べないこともある。しかし、そ

んなときでもあえて食欲がるようなことがない。

蝦夷の地では、金錢が通用しない。アイヌの人たちはいろいろな細工物・干魚・魚油を、商人の持つて来る米・酒・木綿・刃物類と交易する。

また、暦というものがないので、自分の生まれた年も、親の亡くなった年なども知らない。だから、そのことを知ろうとすれば、その当時のこととを知っている人たちが集まつて考える。四季は草木の生長や、魚や虫の現れるのを見せて知る。

蝦夷では租税も無く、金錢も通用しないので、金銀をもうけたり、貯めたりする意欲も起きない。野菜を食べない

ので田畠を耕す苦労もない。魚も沢山とるので、明日の心配をすることもない。それでその日を暮らしている。粗食粗服もあえていとわざ、いたってバカ正直ともいえる生活をしている。

#### 【注】

場所 || 松前藩は領内に農業が発達していかつたので、ことに米の収穫がなく、年貢米のないことが他の藩と違っていた。そこで藩士への給与も独自な方法で行われ、これが「場所」といわれた。

蝦夷地を多くの場所に区分して、この場所を藩士に給与した。このように場所を持つ藩士を場所持ちといった。

このような制度ができた年代ははつきりしないが、慶長年間（一五九六）ではないかといわれている。

ので田畠を耕す苦労もない。魚も沢山とるので、明日の心配をすることもない。それでその日を暮らしている。粗食粗服もあえていとわざ、いたってバカ正直ともいえる生活をしている。

場所を持っている藩士の給与であった。

場所請負人 || はじめは場所

持ちの藩士が、自分でアイヌの人たちとの交易を行って

になれた商人に任せた方が都合がよいことから、場所持ち

は商人から料金を取って交易を請負わせるようになつた。

この商人を請負人（または場所請負人）、請負うための料金を運上金、交易するための場所を運上屋といった。

運上屋 || 請負い場所にある交易所のことで、アイヌの人たちと物々交換した品物を荷造りし、冬にならないうちに船に積み込み、場所を引き上げる。交易が盛んになると、働く人たちが寝泊りできるよう建物も大きくなり、漁具や漁獲物などを入れる船蔵、米蔵・雑蔵なども造られた。

運上屋というのは日本海沿岸での呼び名で、東蝦夷地では会所といつてている。

つづく

## 反抗の軍歴

V

土川 義雄

N.O. 125

「ヨシッ……タスケテ！」廊下をバタバタ駆けて来る足音と

ともに、彼の寝ていた部屋の引戸がいきなり開けられ、この旅館の娘が飛び込んで来るなり、吉野の布団の中に入り込んで来た。

背中にしがみついて離れようとしない娘に、「どうしたッ」と訳も聞かないうちに、またも廊下を荒々しく踏み鳴らして、今度は息を荒げた白木中尉が飛び込んで来た。

第一回目の出撃で、彼等の自慢の彗星艦爆部隊はあえなく全滅してしまい、先発して南の島で待つ二十人ほどの先遣隊に、本隊からどうゆう指示が出ているのか、毎日のようによつて島内を移動していた。今夜もそのトラック部隊は、美しく花咲く村落の旅館泊り

となり、お決まりの酒盛りとなつた。

銃爆撃で、連日命を縮めさせられている兵士の飲みっぷりは荒かつた。あまり飲めない吉野は、こんなとき上手に席を外して部屋で一人寝を楽しんだ。このときも兵たちは、遠くの広間でまだ大騒ぎをしていた。

学徒出陣で、一年少々で中尉に進級した白木中尉がこの先遣隊の指揮官で、彼より二年も三五年も古い下士官が、この隊には五人もいるから、中尉は何かと息苦しいのか、ただの一度も下士官、兵とは酒の席での同席はなかつた。

自分一人の部屋にて、旅館の娘を相手に飲んでいるうちに彼女に襲いかかつたらしい。彼女のブラウスは、ボタンが飛んてしまつただけでなく、ボロみ

たいに引き裂かれていた。

この宿は、これが二度目の宿泊であり、吉野のことを覚えていたらしく、着くなり「ヨシシ」と呼んで満面に親しみをこめて迎えてくれ、ほかの兵から大いに焼き餅をやかれるはめになつた。

「吉野兵長ッ……貴様ッ……」将校にタテつく氣かア……」酔いと、女に逃げられた口惜しさと、逃げ込んだ女が彼の背中にしがみついている光景は、

階級の傲慢と合わせて、白木中尉を完全に狂わせてしまつた。

いきなり鉄拳が吉野の顔を襲つて来た。突如吹きつけてきた火炎を避けるように、吉野の拳の方が速かつた。中尉の腹にぐさりと突き込まれた拳は、今まで中尉が飲み食いしていたものを、全部吐き出させる充分の威力があつた。

吉野に少しの躊躇（ちゅうちょ）もなくなかつた。脅（おど）しの形ぐらの中尉の軍刀は、すぐ吉野にたたき落され、その軍刀で逆に吉野に追い廻される

多くの仲間を馬鹿げた特攻で失い、護り切れなかつた部下の数人の面影を、悔恨の想い出として引きずつてゐる吉野に、今それはけ口のような狂暴な攻撃対象が現れたのだ。

中庭に追い詰められ、池の傍に土下座して吉野に懸命に生命乞いをしているころになつて、ようやく下士官たちが駆けつけて来た。五人とも口を揃えて中尉をなじり、事件にすれば証言するとすごんだ。

美しい南十字星は、この夜も部屋から出て来た中尉の手に輝いていた。

この稿終わり

— 来し方をかえりみて —

## 亡き母を想う

渡辺ハツエ

永い人生——悲喜こもごもの思いを胸に、私の来し方が、齡をとることに懐かしく脳裏にうかんできます。

思い出すと、あれはもう十年も前のことです。鮮やかだった丸山の紅葉もすっかり枯れ落ちて、外は冬のたたずまいでした。庭に最後まで頑張って咲いていた小菊を手折って、自転車で亡き母の命日のお墓参りに出かけました。

その日は風も穏やかで、初冬にしては珍しいほどのお天気でした。

「今年は、これが最後のお墓参り」と思いながら、念入りにお掃除をし、家族の近況などを報告して、その年はゆったりとした気持ちのよいお墓参りで締めくくることができました。前の年のお墓参りでは苦い思い出

を残しただけに、なおのことそんな思いが強かつたのかと思ひます。

あれは、いつものように自転車でお墓参りに行く途中のことでした。役場前の交差点で信号待ちをしていて、青に変わると同時に、お墓の方向を目指して一気にペダルを踏んだのです。そのとき、同じに信号待ちをしていて、余市方面へ向かう乗車と接触したのです。幸いスピードも出ていなかつたので大したことはありませんでした

が、私の一生の不覚でした。車から降りて、私のそばへ来られたのはご婦人の方でしたが、優しくていいねいな言葉をかけてくれて、かえつて恐縮しました。

私の不注意もあつてお詫びをしました。自転車のかごが少しばかり変形した程度でしたが、私

はびっくりした余り、静かに走り去つて行く乗用車をただぼう然と見送つていました。

母が健在だったころ、私が自動車で出かけるときには、いつも「気をつけて行つて来いや」

と声をかけて、我が家へ帰るまでも心配してくれていたものでした。

このたび災難を逃れられたのは、今は亡き母の加護のたまものと思って感謝しております。

重宝がられていました。

昭和のはじめ、私たちが子どもころはゴム長ぐつは高価なものでしたから、ほとんどの人が編んだ長めのくつなどを履く人もおりました。そして、戦争中は物資が不足していましたから、そのほかにもわらで編んだツマゴ（短いわらぐつ）やバッタラ（つつかけ）といったよ

## 履物のはなし

竹内コト

わらじは長時間歩くときなどに

• 次ページ上段へ続く

じでした。

間もなくして、ゴム長ぐつより短いでんぶ

(前ページ下段より続く)

す。その後は、ゴムの短ぐつや履きやすいズックぐつが子どもたちに広まつていきました。また、ゴム長ぐつもだいぶ安くなつて、雨の日や冬の必需品になりました。

また、下駄類が一般的な履物で、日和下駄や駄、冬には雪下駄などのほか、木の種類や作り方いろいろなものがあり、うるし塗りやござを張つたもの、模様のあるものなどで値段もずいぶん違つていました。

女の子はお祭りになるとガッパ(ポックリリ木履)というのを履いていました。いま若い人たちの間ではかがとの高いくつが流行しているようですが、ガッパというのは厚い円形の木の底をくり抜いて鉛をつけ、つま先の下を削つて歩きやすくし、赤く塗つたおしゃれな履物でした。

私のところは兄姉が多く、いつもお下がりばかりでしたが、あるとき、母が苦労して買ってくれたガッパを見て、これは新商品だと喜んで履いていたことを

思い出します。

以前は生活必需品であった下駄も、いまではお祭りで天狗さんが履いているのを見るとさまざまですから、下駄を履けないといふ人がいるのも当然かも知れません。

昭和三十年代になると、ビニール製の履物が流行したようです。色も形もびっくりするほどきれいで、種類も多く、それに値段も思つたより安く、むかしからの履物は利用する人も少な

くなつてしましました。近ごろ

の履物、といつても靴ですが、履いているのを見るとさまざま

で、これだけ生活も豊かになつたということなんでしょうか。



あとがき

暖冬も大寒で寒さが戻りましたが、間もなく立春です。立春とならんで立夏・立秋・立冬とあります。立春の前日の節分がなにかと話題になります。立春は旧暦ではお正月を祝い、節分は年越しの日です。最近はクリスマスが盛んで、お正月の伝統的な行事もすっかりかすんでしまいました。いつそのこと、立春をお正月にしたらどうでしょう。

古平ホトトギス会	
初み空國旗はためく金物屋	街は雪鶯餅はもう店に
山口 暁子	よしざきり
初場所の晴れ着姿の行司かな	暫くは飾つて置きし柚子一つ
越野 敏雄	仲谷比呂子
りんの音の消えぬ思ひの冬至かな	二千年瓶に若水張つて置き
大和田絵伊	越野 清治
鳥賊釣り火今宵は遠き沖に燃ゆ	羊蹄山に懸る雲なし秋高し
福井 幸平	室谷弘子
ビル窓の氷柱落どしの命綱	初鶴丸山岬明けて来し

# 吉平町岬短歌会一月詠草

みやげよと孫はわが掌に紅き小箱米粒の七福神は愛し  
離れ住む孫の夫婦が送りくれし膝掛暖かく冬を旅ゆく  
万年筆の文字なめらかに淀みなし友の明るきハワイ便りは  
病院に行かず過ごせしこの一年よろこび事の當初にあげぬ  
年末に商小魚貝類の生産を急ぐ加工場に姫らは行く  
広島の友の賀状はテレビで見し雪と蒸氣機関車なつかしとあり  
正月の玄関に並ぶ孫らの靴われの物より何れも大きく  
新春の耀ふ海の真向ふに雄冬の連峰鮮明にあり  
お互に背のびするよに真直ぐな紅きシクラメン今朝も窓辺に  
床柱に茶花と掛けし寒椿冬の寒さを堪えて咲きとり  
父三十年母十五年の年祭を務め上げて夫は深々眠る  
事なかれ主義を通すが妥当かと除夜の御酒になやみぶつけむ

菅原節子 池田テル 奥山きよみ 知東内コ 竹内佳代  
鈴木時子 中香苗典子 丹後初江山口ス 田中香苗山口ス  
堀田中香苗山口ス 佐野千鶴子 佐野千鶴子

石井愛子

北道政

今年にも陽のあたる年に婆の背に  
年長(た)けで名前呼び合う同級生  
お年玉四人の孫の笑顔目に

渡辺ハツエ

核武装百害あつて一利無し

一生涯起こしてならぬ事件事故  
あの世まで持たせてやれぬ服の処置  
絵も入れて孫の賀状の腕の才

(誤)

国民も重い国债背負う國  
民も思いい国债背負う國